

【鳥取県の全体目標】

がんによる死亡者の減少 75歳未満がん年齢調整死亡率(人口10万対)を**61.0未満**とする

(令和10年度まで)

(男女別の目標値 男性：74.0未満 女性：46.0未満)

【中期目標】

高精度放射線治療を進めつつ、県全体に放射線治療の浸透を図る。

前年度目標	高精度かつ、標準的な放射線治療の推進を維持しつつ、地域の病院との連携を進め、各病院において症例数の増加を計る。	
	前年度Plan	前年度Act
治療の高精度化を推進し、症例数の増加をはかり、そして標準的で安全な治療を提供する。		鳥大病院では、治療件数の大幅な増加が見られた。県立中央病院でも順調にIMRTが行われている。しかし、全体として放射線治療が浸透しているとはいえ、一極集中を避けなければ、リニアックの継続すら困難な場合が生じてくかもしれないため、県全体の底上げも高精度治療と同様に重視する必要がある。

今年度の目標	基幹施設における高精度放射線治療の継続的推進と、関連施設における通常照射の安全な提供、そして一極集中を避け県全体の底上げを図る。		
Plan(計画)	Do(実施)	Check(点検・評価)	Act(処置・改善)
<b>基幹施設における高精度放射線治療の推進</b>			
鳥取大学病院、県立中央病院 鳥取大学病院	IMRT 定位放射線治療(SRT)：脳、肺、肝臓 画像誘導小線源治療(IGBT)：腔内照射、組織内照射併用	鳥取大学医学部附属病院では、9月までの6か月間で前年度より増加がみられる。IMRT、定位放射線治療ともに順調と言える。IGBTに関しては前年度より少し減少しているが、運用に問題は認められない。県立中央病院でもIMRT、定位放射線治療についての経験はかなり積まれてきている。症例数も増加していると報告を受けており、IMRTの割合は70%をこえる。	
県立中央病院	IMRT SRT：脳、肺		
<b>専門的放射線治療の集約化</b>			
鳥取大学病院	上記に加え、アイントープ治療、前立腺癌組織内照射	鳥取大学病院では左に示す専門放射線治療は、順調に運営されており、新たに開始されたルテチウム治療も順調である。県立中央病院でもルテチウム治療が積極的に施行されている。	
県立中央病院	上記に加え、アイントープ治療		
<b>高精度ではないが、標準的な治療の継続的な提供</b>			
鳥取赤十字病院 県立厚生病院 鳥取市立病院(本年中に終了) 米子医療センター	・これら4施設では、常勤医がいないか、高精度治療の要件を満たしていないが、治療のニーズは一定数ある。したがって、本年度も通常治療である3D-CRTを継続的に施行していただく。	鳥取市立病院では年内で治療を終了するが、その他の施設では、著明な増加はないものの、本県の市中施設における基本治療である3D-CRTが、診療支援のもとほぼ前年度と同様のクオリティで行われている。	
<b>人員の増加をはかる(中長期的視点が必要)</b>			
鳥取大学病院(常勤医4名、専門医4名、若手治療医0名) 県立中央病院(常勤医2名、専門医2名、若手治療医0名) 鳥取赤十字病院(常勤医0名、専門医0名、若手治療医0名) 県立厚生病院(常勤医0名、専門医0名、若手治療医0名) 鳥取市立病院(常勤医1名、専門医1名、若手治療医0名) 米子医療センター(常勤0名、専門医0名、若手治療医0名)	・県内では、常勤医が不在の施設が現時点で3施設ある。それらに常勤医を配置することは極めて困難である。 ・人員の増加は基幹施設の診療クオリティの維持を第一に考える。 ・若手治療医が極度に不足しており、学生時からの教育・勧誘を第一とする方針に変化はないが、公募等も視野に入れて考える必要がある。 ・最早、中長期的目標としてじっくりやっていく必要がある。	・鳥取大学病院では、放射線治療科に来年度より専攻医を一名迎えることが決定している。 ・しかし、常勤医を追加で配置する人的余裕はない。本年度も現在まで学生教育を重点としており、学会やセミナーへの積極的参加も呼びかけ、一定の効果は挙げている。	
<b>県内施設間での連携の推進</b>			
基幹2施設、県内6施設、可能であれば相互間の連携が取ればよいが、まずは鳥取大学が中心となって関係を構築してゆく。	・昨年度は、診療支援による連携に加え、いくつかの施設で講演を行うなどして、連携は強まったと考えるが、本年も同様な手法での連携をはかってゆく。 ・研究会等を通じて、各職種間での連携を図ることが出来ればなおよいと考えられる。	・県内の放射線治療施設すべてに診療支援を行うことで連携を密に取るようにしている。 ・また、本年に入ってから県内施設(米子医療センター、鳥取赤十字、厚生病院)で啓蒙のための講演を行ってきた。今後は山陰労災病院等での講演を行い、治療設備のない病院にも理解の増進をはかってゆく。 鳥取大学病院では、症例の極端な増加を避けるため、症例数をコントロールする取り組みを継続している。現在のところ昨年度のような極端な増加はない。	
<b>安全性重要視の再認識</b>			
	・鳥大病院では、昨年度極端に症例数が増加したこともあり、さらなる安全性の再認識を重要視する。症例数をコントロールし、場合によっては近隣施設への依頼も行う。これは、一極集中を避けることにもつながるものである。		